

# 帝國主義大學解体——二重權力創出

## 9.5 共産主義教育の集大成

共産主義教育は、1945年頃田中角三に開始され、新学級階級斗争の内幕を露け継ぎ発展させ、一足踏まぬものとするべく、1947年10月、近代階級斗争の基調を示すものとなっている。すなわち今日の大学斗争は、たゞ改良要求、政策改変、転換の斗いとして開始されたものも、その発展・深化にももたつて、改良要求の基盤、自らの存在基盤、制度そのものの根本的斗いとなっている。学生参加、学内制度改善等による近代化路線での改進黨、学内の終結を拒否する中で、「学内自由、大学の自治」の名を隠蔽し水に投げて大学に於ける研究、教育、学内の階級性、支配秩序を実践的に暴き出す。同時にこれは「平和と民主主義」を根拠とした学生のパシゲム的統一を打ち出す、学生の間接支配、産業界の共闘への結集を打ち固め、その根本である支配権力の再編を提起し、それへの闘い、自らの二重権力創出に向ける闘い、個別権力斗争への発展を導き取っている。

## 9.4 学内総決闘

戦後民主主義とポツダム民主主義との対立における闘いが、防衛的、無方針的として展開し得なかつたのに対して、臣天斗の斗いは権力闘争の提議を軸に、積極的運動的ポツダム民主主義の破綻を進行中から、支配階級への直接的暴力的対決を実現して闘う隊列の強化、闘いの激躍的発展を表現し、新たな階級斗争の内幕を生証的に実現している。かかる内容での個別斗争の極限までの推進と、その点を獲得された個別斗争の非階級性の認識と、日本階級斗争の新たな局面を開く。① 産業界のポツダム体制の左からの破綻 ② 日帝の大東亜共栄圏とアジア侵略政策の強行突破のためにポツダム的階級関係の右からの破壊と強力的暴力的階級支配 ③ 1947年以前級斗争は、アジア国際階級斗争として、単一の不可避的解放斗争として形成される。④ アジア解放斗争としての日本帝國主義打倒の革命路線の勝利が、それに打ち勝つての日本帝國主義の飛躍へと向かっている。』は、大学斗争の臣天的結晶、普遍化と母体結晶、沖繩解放斗争を中心とする人民の斗争課題、労働者階級の斗いと革命路線の課題を

現象化している。

臣天斗運動が明らかになり、これは、個別学問・研究、教育に拘われない、大学の存在そのものに係わる運動として展開される。総じて述べると、大学支配の本質はブルジョア支配であり、その学内支配はブルジョア的支配であり、ブルジョア的階級下層の権力支配、たものである。そしてブルジョア的意識を一定程度政治的に満たすことになり、彼ら自身を総体としてブルジョア的階級に属し、階級支配の暴力性を醸成し、学生、職員の不満、闘いが暴発するに陥ることなく、学内総決闘として展開する大学運動、支配階級として存在する。大学の社会存在（帝國主義大学としての）と、帝國主義支配の一環としての大学の存在が向かわれる。

個別斗争の積極的発展と非階級性の認識は「帝國主義大学解体——二重権力創出」の入口一歩を形勢づいたものとしている。これは、今日の大学のその本質的階級性、個別改革の解決を拒否する不断の斗争の進行のた。『帝國主義大学解体——二重権力創出』の入口一歩は今後の斗争の展開をどのようにして行くのかという具体的な提議、すなわち日本帝國主義大学として把握した上で、それをどのようになすか、闘争して行くのか、我々は何を討議し、それをどのようになすか過程を通じて帝國主義大学も覆るべき行くのかという問題である。我々が帝國主義大学としての日本支配者管理秩序を破壊するといふ時、それは同時に大学に行われているブルジョア的学問・研究、ブルジョア的学問研究自体を破壊する闘いである。帝國主義大学解体の過程を帝國主義的支配管理、秩序に対し、我々の支配管理秩序を対置し、ブルジョア的学問・研究、ブルジョア的学問研究に対してプロレタリア的学問・研究を対置する斗争として展開しなければならぬ。

日本大学 大学部斗争委員会  
芸術学部斗争委員会